感性と風景
「感性都市工学」への挑戦

精山明敏　京都大学大学院医学研究科 教授
山田圭二郎　京都大学大学院工学研究科 特定准教授

「感性都市工学」は、医学・工学が融合した新たな研究テーマに発展する可能性の高い内容を講述することを目的とする「共通発展科目」に位置づけられた、当ユニットならではの意欲的な試みとしてスタートした。

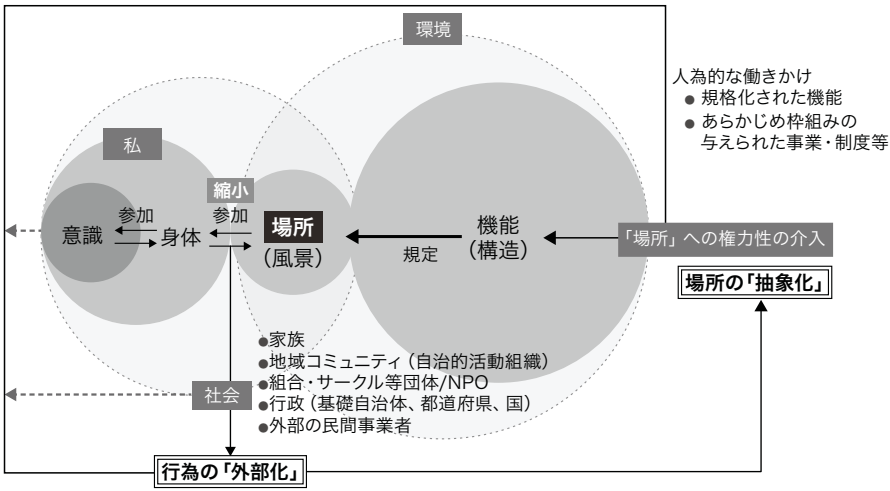
本講義は当初、精山明敏（医学研究科 教授）、安東直紀（工学研究科 特定准教授）、山田圭二郎（工学研究科 特定准教授）の3名の講師陣でスタートした。精山は感覚・知覚・認知にかかわる人間の生理特性と脳機能メカニズム、その計測方法を解説。安東は、感覚や感性を意思決定モデルをもちいて数理モデル化する方法として、ファジー理論、遺伝的アルゴリズム、ニューラルネットワークなどの理論と都市工学への応用の現在を解説した。山田は、都市空間や景観の評価に現在使われているさまざまな指標や、ヒューマンスケールを考えるための尺度、都市空間・景観を客観的に記述する方法を解説した。

そのご、受講した履修生との討議の結果も踏まえ、講義内容を変更した。「感性」という言葉そのものの定義が学術的にはいまだ曖昧ななかで、より幅広い視野からこのテーマをとらえようという主旨である。第三期からの科目再編にあわせて、講義名を「感性都市空間論」に変更し、上記3名に土井勉（工学研究科 特定教授）、孔相権（医学研究科 特定助教、現・山口大学講師）、今村行雄と村上由希の2名（いずれも医学研究科 特定研究員）が加わって、講義を継続してきた。

「感性」とはなにか

「感性都市工学」では、「感性をどこまで定量的に測れるのか」を問題意識のひとつとしてきた。感性を測るためには当然、そのための定義が必要と

資料1 「私」の場所への参加、その「外部化」と場所の「抽象化」



なる。本稿では、開講当初の「感性」の定義（精山による）を手がかりに、「感性」とはなにかについて検討してみたい。

いま、なぜ「感性」なのか

まず、いまなぜ「感性」という言葉が、社会的にも学術的にも注目されるようになってきているのかについて、簡単にふり返っておきたい。

かつての地域は、都市であれ農村であれ、そこに暮らす個々人や地域社会が直接的に「場所」に手を入れることによって営まれてきた。しかし、雑ぱくにいってしまえば、機能性、効率性、経済性などを中心とした現代の社会的要請のなかで、「場所」は、都市計画などの制度設計にしろ社会資本整備にしろ、私たちの手の直接入らない間接的なサービスを通じて整備され管理されるようになった〈行為の「外部化」〉。

場所はそのようにして、規格化された機能（標準設計など）や、あらかじめ枠組みの与えられた制度・事業等を外部からなかば強引に組み込むかたちで――やや厳しい言葉でいえば、場所への「権力性の介入」により整備・管理されるようになった。それにより、自分たちの暮らす場所（空間や社会）に、私たちが「当事者」としてかかわっているという事実も、実感も、薄れてきているのではないだろうか[1)]〈場所の「抽象化」〉（資料1）。

こうしたなか、生きていくうえで、ほんらい欠くことのできない「生き生きとした生（生活）の実感」、人間にとって固有の、豊かで独特な体験世界の

質や意味――人間的意味を、私たちはいま、身体的に欲しているようにみえる。それは、私たちが「生きている」ことそのものの実感への希求といってもよい。逆にいえば、それこそが、私たちのつくってきた機能的で効率的な都市が欠落させてきたものなのではないか。

私たちは、化学物質の充満した池の水面で口をパクパクする魚のように、科学という抽象的意味が充満し、富栄養化した「都市」という容れもののなかで酸欠状態におちいり、喘いでいる……。

主観的な体験世界は科学的実証が困難なゆえに、学術研究はこれまでその世界にじゅうぶん配慮できていなかった。しかし、脳科学・情報学などにかんする技術的・学術的進展にともない、これまで医学研究ではタブー視されがちだった情動や感情、意識、こころ、感性などを対象とした実証科学研究の進展がめざましい。科学的実証主義への偏重を反省し、私たちが主観的に見いだす価値や情緒を重視する、あるいは主観と客観とのあいだを結びつけようとする意欲的研究は、人文科学分野で盛んである[2)]。こうした学術動向は、上述の社会的背景とけして無縁ではないはずだ。

「感性」とはなにか？

さて、「感性」の定義である。

精山は、「感性都市工学」の最初の講義のなかで、脳科学者A.R.ダマシオの言説を踏まえつつ、「感性」は「外的刺激に応じた感覚器官の感受能力」であるとした。そのうえでさらに、より実践的には「人間の身体的感覚にもとづく自然な欲求」だとした。

この、人間の自然な「欲求」という部分は、たいへん示唆に富んでいる。なぜなら、この「欲求」という言葉は、外的刺激にたいするたんなる反応ではなく、私たちが(直接的・間接的、あるいは意識的・無意識的に)外界に働きかける能動的側面――たとえば、意味づけするといった間接的な働きかけを含んでいるからである。「感性」の問題は、刺激にたいする受動的「反応」の側面からだけでなく、能動的なこころの働き――「志向性」の側面からもとらえられるべきだと思うのだ。

では、私たちの「感性」は、なにを「欲求」するのだろう。さきに述べた社会的背景を踏まえたうえで、ここではそれを、主観的な体験世界の「リアリティ」への欲求ととらえたい。体験世界のもつ豊かな質や意味は、おおくのばあい、「風景」――目に見える世界とのかかわりを通じて体験される。ゆえ

に、これを「風景のリアリティ」といってもよい。

風景と感性

主観的体験のリアルな質感は、たとえば「クオリア」問題として扱われる。これは、「バラの花の〈あの〉赤さ」とか「空の〈あの〉青々とした感じ」といった、〈あの〉としか形容しようのない、しかし疑いようのない特有の「感覚質」のことである。しかし、クオリアが扱うのは、基本的には、あるひとつのモノのもつ感覚質の最小単位のようなものであって、さまざまな要素や空間の質（趣き）、人間に固有の情緒や意味などから生まれる「風景のリアリティ」とは、おそらく異質である。

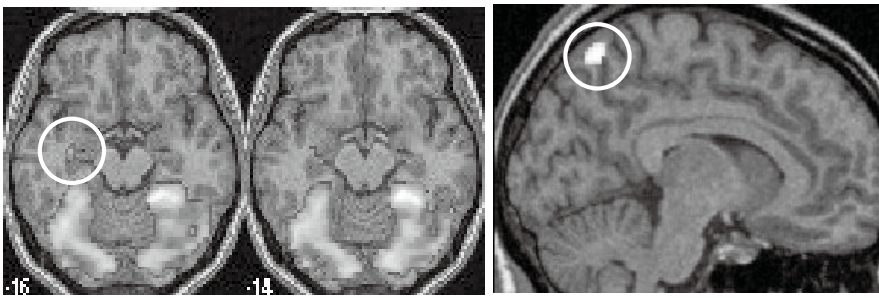
風景のリアリティと感性

「風景のリアリティ」は、対象のもつ質としての「〇〇らしさ」のみならず、「いま、ここ」に生きるアクチュアルな存在である「私」にとって疑いえない、体験の豊かな質や意味、それを直観的につかみ取る主体の側の心的作用を含む。そしてそれは、「いま、ここ」での体験の豊かさにとどまらず、「私」という存在にかかわる――存在の承認あるいは当事者性の承認といった、重要な質ないしは意味を生み出しているのである。[3)]

地理学者のA.ベルク[4)]は、「場所」的次元と「空間」構成的次元のあいだのバランスや両者の「通態」(trajet)の仕方に、ある文化、またその風景の特性があらわれるとする。純粋な「場所」とは、完全に身体化（馴化）した――たとえば、目を瞑ってでも一段抜かしで家の階段を駆け上がれるような世界のことであり、おそらくそれは言語化不要または不能な、したがって対象の趣き、それへの感情の動き（情緒）や意味作用のない、唯一無二の特殊性をもった世界である。他方、純粋な「空間」とは、私たちが直接に触れることのできない、純粋幾何学的で、だれにとっても等しく普遍的な――ゆえに、ある意味では等しく「自由[5)]」な世界であり、それもまた、私たちの情緒や意味の作用とは無縁の世界である。

しかし、現実には、私たちの記憶でさえ、そうした純粋な「場所」的次元でも「空間」構成的次元でもおそらくありえない。私たちは、はじめて訪れた場所であっても、「なつかしさ」や「居心地のよさ」といったある種の情緒や特別な意味を見いだしている。つまり、そこには外的刺激にたいするたんなる反応を超えて私たちが生み出す、「場所」と「空間」のあいだを往き来す

資料2 fMRIによる風景画像認識時の脳賦活領域の解析結果の一例



左の画像では記憶にかかわる「海馬」が、右の画像では視空間イメージや自己関連処理などにかかわるとされる「楔前部」が賦活している

るなんらかの心的な「作用」やその「志向性」があるはずなのだ。E.レルフ[6]は、「物質的要素、人間の活動、意味(意図と経験)を結びつけ包含する」働きのことを、場所の「センス」(A.ベルクは「サンス」)と呼んでいる[7]。

日本的感性とリアリティの本質

この働きを「感性」と呼んでよいかもしれない。そして、その働きがどのような志向性をもつかが、「日本的感性[8]」といった文化的な特性のあらわれ方に違いをもたらしている。風景の「リアリティ」に求める内実にも、おそらくは文化的な違いがあらわれてくるであろう。

たとえば、日本語の「言葉」。「言葉」は「コト(言)のハ(端)」を語源とする。「言(コト)」は「事(コト)」と重なる意味をもつとされるが、「コト」とは、私たち(日本人)がなにを大事にするのかという点での、体験世界のある「本質」――絶対的・普遍的事実(実体)としての「本質」ではなく、みんなが大事に思うことの「核心」の意――のことではないかと思う[9]。それを「リアリティ」と呼ぶとして、そこには万人に共通するものもあるだろうが、日本人が重きをおく「風景のリアリティ」もきっとある。その本質は「モノ」そのものか。「コト」にあるのか……。

さきに述べた社会的背景に話を戻せば、現代の私たちは「抽象化」してしまった場所に生きている。精山が定義した「人間の身体的感覚にもとづく自然な欲求」としての「感性」の働きはいま、「場所」的次元のかかわり(身体的感覚)にもとづく「リアリティ」を強く志向している[10]。そして、私たちの暮らす都市空間は、その欲求を満たすリアリティをもった「風景」として再構築されなければならない。

この再構築の行為は、そのリアリティを「空間」構成的次元にふたたび結びつけ──「景化(payser)」(A.ベルク)し、空間や社会、私たちの心や身体を含む「場所」を編みなおす編集行為にほかならない。

われわれの挑戦

われわれ(精山・山田)はこの5年間、学内助成(京都大学2012年度 外部資金獲得支援経費)や科学研究費補助金(挑戦的萌芽研究:2013、2014年度)を受けて、機能的磁気共鳴画像法(fMRI)などを用いた風景画像認識時の脳賦活メカニズムの解析を進めてきた[11]。その成果は現在、査読論文化の中途で、詳細はまだ報告できないので、ここでは解析結果の一例を示しておくにとどめたい(資料2)。

しかし、関連するさまざまな脳領域や、それらの相互フィードバック(フォーワード)にかかわる脳部位など、風景のリアリティや「感性」の働きを示唆する重要な成果を挙げつつあることは確かである。

安寧の都市ユニットは、2014年度をもってその役割を一応終えることになるが、今後もわれわれは共同して、このテーマに取り組む予定である。

参考文献

1) 山田圭二郎 著「親水の時代と場所と計画」(序論)、日本建築学会 編『親水空間論──時代と場所から考える水辺のあり方』技報堂出版、4-11頁、2014年
2) たとえば、以下を参照。
皆藤章 著『風景構成法のときと語り』誠信書房、2004年
鈴木晶子 著『智慧なすわざの再生へ──科学の原罪』ミネルヴァ書房、2013年
3) 風景の人間的意味に、存在や当事者性の承認の感覚があることについては、以下を参照。
山田圭二郎・西研 著「風景の人間的意味を考える──『なつかしさ』を手がかりに」、『風景とローカル・ガバナンス──春の小川はなぜ失われたのか』早稲田大学出版部、211-245頁、2014年
4) A.ベルク 著『風土の日本』ちくま学芸文庫、1992年
5) Y.F.トゥアンは、「場所」は「安全」で「空間」は「自由」であり、人間の生活は「安全」(庇護)と「自由」(冒険)の弁証法的な働きによるとする(『空間の経験──身体から都市へ』ちくま学芸文庫、1993年)。
6) E.レルフ 著『場所の現象学──没場所性を超えて』ちくま学芸文庫、1999年
7) ベルクやトゥアン、レルフの言説の構造的類似性については、以下の文献で明晰に解説されている。
藤倉英世 著「基礎自治体における景観と自治の再構築に関する実証的研究」、首都大学東京 博士学位論文、2012年
8) 佐々木健一 著『日本的感性──触覚とずらしの構造』中公新書、2010年
9) 関連して以下を参照。中村良夫 著「山水都市の運命を担う市民社会」、※文献3)、17-62頁、2014年
10) 関連して以下を参照。中村良夫 著「『安寧の都市』論の構築に向けて──身体と場所の風景論から」、安寧の都市研究第1号、4-17頁、2011年
11) たとえば、大崎可織・山田圭二郎・松本純也・精山明敏ほか 著「fMRIを用いた景観評価の検討」、日本生理学雑誌、第76巻第2号、89頁、2014年など。